

# メンガー『国民経済学原理』の統一的解釈について

塘 茂 樹

## 始めに

- 1) 財概念
- 2) 「支配関係に置かれている状態」の問題点
- 3) 方法論的個人主義
- 4) 主観主義
  - 4 - 1) 主観価値
  - 4 - 2) 限界効用
- 5) 資本と利子
- 6) 商品と貨幣
- 7) 『原理』統一軸としての「支配関係」

## 結語

## 参考文献

**キーワード：**カール・メンガー、支配関係、主観主義、方法論的個人主義、自生的秩序

## 始めに

2004 年の 12 月 18 日 - 19 日に一橋大学社会科学古典資料センターにおいて「メンガーの『国民経済学』と自由主義の歴史的諸相」と題して国際シンポジウムが開催された<sup>1)</sup>。本稿は、同シンポジウムにおける報告者の一人として参加した筆者が、その内容をさらに改訂したものである<sup>2)</sup>。さらにこの成果報告は、筆者が橋本比登志名誉教授と 2001 年から遂行してきたオープン・リサーチ・センタープロジェクト「市場経済論関連資料のデジタル化による管理と公開」の一成果報告と位置づけられる。このプロジェクトは、経済学の古典のテキストを、インターネットを通じていつでもどこでも参照可能にする電子図書館の構想を实践するものであり、ほんのわずかであるが、北欧学派（ヴィクセル<sup>3)</sup>）

オーストリア学派の創始者たち（メンガー、ベーム、ヴィーザー）の初期の主著について実現することができた<sup>4)</sup>。この次の段階として、これらのテキストについて内在的再評価が進められなければならない。そのような知的営為として、例えば通説の再検討をはじめとし、それまで注目されず無視されてきたけれども、合理的な解釈にとって必要不可欠な視点を浮き彫りにすることなどが挙げられよう。

メンガーの『国民経済学原理』（以下、『原理』と略称）は、近代経済学史上、ミクロ経済学成立の皮切りとなったいわゆる限界革命の担い手である三著作<sup>5)</sup>の一つとして言及される。しかし、その場合、著作全体ではなく、最初の5章だけが言及の対象となるにすぎない。残りの三章は、ミクロ経済学の基礎付けという観点からはまったく無視されてきたのである。それは、各章のタイトルを見るときわめて納得的である。

第一章 財論

第二章 経済財

第三章 価値

第四章 交換

第五章 価格

第六章 使用価値と交換価値

第七章 商品

第八章 貨幣

現代のミクロ経済学において、最後の三章のタイトルとして登場する「使用価値と交換価値」「商品」「貨幣」は基礎概念として登場しない。したがって、メンガーの『原理』はミクロ経済学の出発点としては、最初の5章だけで十分であるという認識が行き渡り、実際にメンガーのテキストを経済学の古典として紹介する時、最後の三章は省略されてしまうのである<sup>6)</sup>。

しかし、この省略部分、とりわけ第七章「商品」第八章「貨幣」の内容は、ほとんど変更されることなく、メンガー自身によって1892年の『エコノミック・ジャーナル』誌上において、「貨幣起源論」として、英語で紹介されるに至る。それは、個人の意図せざる結果として成立する社会制度の一つとして貨幣の登場を説明しようとする議論であり、後にハイエクによって、いわゆる「自生的秩序（*spontaneous order*）」論の一源泉として高く評価されるに至る。

このように、メンガーの『原理』の解釈には、理論的分断が存在してきたのである。それは、前半5章の「方法論的個人主義」部分と後半3章の「自生的秩序論」部分との分断であり、経済学者として健闘してきた初期ハイエクと、社会思想家として展開した後期ハイエクとの対比に対応しているといえよう。では、ハイエクのようにメンガーもまた、『原理』を著述するなかで、経済学者から社会思想家に変身を遂げたのだろうか？あるいは、ミクロ経済学の基礎となる議論と社会思想に関わる議

論とを単に羅列したにすぎなかったのだろうか？

もし仮に、この羅列説を採用するとしたら、第五章の価格形成論が一つの到達点として説明され完結していなければならないであろう。確かに、同章では周知の馬の取引モデルによって価格形成のプロセスが示され、「価格理論」と呼ばれるミクロ経済学の一つの素朴なシステムが、先駆的に提示されているかのように見える。しかしながら、この外見とは裏腹に、メンガーにとって、財の市場価格形成を示すこと自体、彼の経済学の最終目的ではなかったのである。それは彼自身「価格の大きさを交換の本質的なものと見なす誤謬」<sup>7)</sup>を論証することを第五章の課題として設定していることに明確に示されている。

そしてこれこそ、シュトライスラーがメンガーの『原理』に不均衡経済学的側面を見いだすポイントでもあった<sup>8)</sup>。メンガーの価格論によれば、財の市場価格は、限界の売手と限界の買手とのそれぞれの指値の間に決まるのであって、厳密にどの水準に決まるかについては市場の状況によるものとされた。つまり、市場価格が主体的均衡を示すそれぞれの指値に一致することはほとんど希であることから、交換の市場均衡として成立する市場価格はかならずしも主体的均衡と一致しないという意味で不均衡理論とされるのである。ある一定の範囲のどこかに定まる水準自体、交換の本質的特徴ではなく、むしろその一定の範囲が、できるかぎり最大の欲望満足をはかろうとする個人の合理的経済行動によって決まってくることが交換の本質的特徴であるとメンガーは考えていたのである。

本稿はいうまでもなく、羅列説を採らない。むしろメンガーの『原理』は、ある一つ概念に基づいて、統一的かつ体系的に著述されており、上で言及したような理論的分断などなかった点を主張することが本稿の目的である<sup>9)</sup>。その概念とは、「支配 (*Verfügung*)」であった。本稿では、メンガー『原理』において同概念のもつ意味を明らかにすることによって、その統一的解釈にとって必要不可欠の概念であることを示すことにしよう。

## 1) 財概念

メンガーは、『原理』の冒頭で、ある物がある個人にとって財となるために満たされなければならない条件としてまず、ロツシャーの財概念「人間の真の欲望満足に役立つと認められたあらゆる物」<sup>10)</sup>を基本的に踏襲し、3つの条件に分解した。すなわち、第一条件：欲望の存在、第二条件：その欲望を満足させる因果連関を招致しうるその物の諸属性、第三条件：その因果連関の当該個人による認識である。

これは単なる分解に留まっただけではない。欲望満足のための「因果連関」という観点が新たに導入されている。その目的は、欲望を直接満足させてくれる消費財のみならずそれを間接的に実現しうる生産手段も財となる点を明示することであった。実際メンガーは、物と欲望満足との「より近い因果的關係」「より遠い因果關係」<sup>11)</sup>といった表現から知られるように、直接的な関係だけを念頭において

いなかったのである。この点は、メンガー自身の財の列次把握を前提としたものであり、『原理』第一章を構成する6節のうち2節（第二節と第三節）がこの説明のために割かれている。そして典型的には「欲望满足のための因果関係にたつ高次財」<sup>12)</sup>という表現によって、ロツシャーの財概念に希薄であった点が補われているのである<sup>13)</sup>。

メンガーが導入した「因果連関」という観点は、彼が1867年8月にロツシャーの財概念規定に接したときに抱いた素朴な疑問に対する一つの到達点でもあった。メンガーは「翼ある言葉 (Geflügelte Worte)」と題するノートにおいて同規定をそのまま引用したあと「喫煙は人間の真の欲望なのだろうか？あるいは、カサノバを読みたいというのもそうではないのか？どこにその境界があるのだろうか？それはきわめて相対的でありいつも議論の余地のある問題である。」<sup>14)</sup>という素朴な疑問を提出している。人間の欲望が極めて多岐に亘り相対的なものであると理解するメンガーが、それを満足させる行為も多様かつ相対的なものである、と考えるのは自然な流れであろう。確かにここでは明示的に満足行為についての言及はないけれども、このコメントがロツシャーの「人間の真の欲望满足に役立つと認められたあらゆる物」という財概念についてのものである以上、この段階で欲望满足の相対性を認識したメンガーが、後の『原理』において欲望满足の「因果連関」という観点に到達し、生産による間接的欲望满足をも含む財列次概念の導出に至るのであった。

しかしメンガーは、ドイツ経済学会における当時の大御所の財定義を「因果連関」という観点によって補完するだけで満足しなかった。さらに新たな条件を付け加えたのである。それは、「その物を支配すること、つまりその物が欲望满足のために招致されうること」という第四条件である。それは決して唐突に提出されたものではなく、「因果連関」と密接に結びついたものであった。というのも、「その物を支配した」状態とは、欲望满足にいたる「因果連関」における経済上の最終項だからである。個人はなんらかの欲望满足のために経済活動するが、ある満足手段を支配した後、最終的に当該欲望の満足を実現するために残されているのは、生理的・心理的・技術的過程であって、経済活動の必要はまったくなくなってしまう。のどの渇きを癒すために水を水筒に確保している旅人がそれをいかなるタイミングで飲むのか、その水がどのように体内で作用して渇きの感覚を除去してくれるのかという過程は、のどの渇きを癒すための「因果連関」に属すけれども、経済行為とは無縁のものである。つまり欲望满足の「因果連関」のうち「経済活動」に関わる過程に限定することによって、その最終項として「支配」という状態にたどり着いたメンガーは、それを財の第四条件として追加したのであった。経済活動の結果その状態が達成されることによって財としての性質が完結し、その財に関してそれ以上経済問題は生じない。この意味で、メンガーが新たに追加した条件は、経済活動の到達点を記述したものであった。

以上の解釈が納得的になるためにここでいう「その物を支配すること」が「支配関係におかれている」という意味であることを確認しなければならない。確かに、メンガーは、4条件を列挙する直前

に、「問題となっている物を実際に我々の欲望満足に招致しうる力を持って」いなければならない点を指摘しているので、この第4条件は、「支配力があること」と解釈できるかもしれない。実際、後にバームによって、「支配力（*Verfügungsgewalt*）」と置き換えられたのであった<sup>15)</sup>。これが同値変換でないことはあきらかである。なぜなら支配力があるからといって必ず支配関係においているとはかぎらないからである。

そして実際には、メンガーの第四条件は、「支配力」ではなく「支配関係」を意味していた。それはメンガーの『原理』第二版において、「支配関係」という表現を明示的に用いていることに確認される。「この物の支配」と記述した後あえて明示的に「その物が人間の欲望を満足することを可能にするような、我々に対する物の関係（*Verhältnis*）」<sup>16)</sup>と説明されている。これは、バームの改訂を是認しなかった表明とも興味深いのだが、それ以上に重要な点は、メンガーの『原理』体系上必要とされる点である。

それは、財概念論の次に登場する「非経済財」と関連している。メンガーは、支配可能量 > 必要量という数量関係にある財を非経済財と呼ぶ。非経済財も財である以上、メンガーの4条件を満足しなければならない。ところで、空気のような非経済財は、支配関係におかれてさえすれば、自由に利用できるのだから、ある物が財となる条件として支配力は必ずしも必要ないのである。この例が示すように、メンガーの第四条件が「支配力」である必要はないのである。

メンガーによって新たに追加された財条件「支配関係」は、経済活動の最終到達点を記述するものである以上、その成立が、先行するいわゆる「ロッシヤー3条件」の成立を含意することは当然であった。なぜなら、ある物を支配しているということは、すでに欲望が存在し（第一条件）支配対象はそれを直接・間接に満足する能力を持った物であるということ（第二条件）が支配している人に認識されていなければならない（第三条件）からである。この意味で、メンガーの4条件は独立ではないのである。もちろんメンガーは「これらのただ一つが欠けても物は財としての性質を獲得できない」<sup>17)</sup>と主張するが、それは、各条件が独立しているからではなく、あくまで、「因果連鎖」がとぎれるという意味においてであった。

## 2)「支配関係に置かれている状態」の問題点

メンガーの財条件論は、ロッシヤーの財条件に、欲望満足への因果連鎖のなかで経済活動の関わる最終項「支配」を、新たに、第四条件として追加したものであった。そしてこの第四条件の意味するものは「支配関係に置かれている状態」にあるということであった。

ここで重大な問題が生じる。それは、すくなくとも二種類の財が、この第四条件を満足しなくなってしまうことである。それらの財とは、将来財と経済財である。将来財とは、将来になってはじめて存在するに至り、将来時点で生じる欲望を満足する手段である。現在時点で存在していない以上、そ

れを現時点で「支配関係に置く」ことは不可能である。一方、経済財とは、メンガー自身の定義によれば、支配可能量 < 必要量という関係にある財であるが、この条件は論理的に、支配可能量 = 0 を含んでいる。その意味は「支配関係に置かれていない」ということであり、第四条件を満たさなくても経済財となってしまうのである。

「支配関係に置かれていること」という財条件に関する以上の問題点について、いうまでもなく、メンガーは自覚的であった。まず、彼は「将来財」という表現はもちいていないけれども、同概念の意味する状況、すなわち、将来に至って初めて生じる欲望に備えることを、彼は経済人の「先慮的行為」と呼び、それが経済活動の重要な契機となる点に言及している。そして、将来の欲望を直接満足する手段を現時点で支配することができないことも彼は十分認識していた。それは、『原理』第一章の最終節で提出された「財所有 (Güterbesitz)」<sup>18)</sup> という概念の中に見いだせる。これは、文化が高度に発展していれば、「特に何らか一種の経済財を十分な量だけ所有しさえすれば他のすべての財の相応量を手に入れる」<sup>19)</sup> という状況を示そうとするものであった。つまり、将来が現在になったとき、所有しているこの特定の財と食料とを交換すればいいのである。したがって、メンガーの「財所有」とは、先慮のもとに認識された将来欲望を満足する手段の間接的支配のことであり、メンガーの財条件「支配関係」を将来次元にも適用可能にさせるための補助概念の一つであった。

次に、メンガーは経済財を周到に定義することによって財の第四条件との齟齬を回避しようとした。それは、経済財の条件式：支配可能量 < 必要量の左辺の意味内容を、他人の支配下にある量をも含むことによってであった。そもそも、この支配可能量が「ある特定の経済主体が支配関係に置いている量」であるならば、それ自体説明を必要とするものではない。それは一般均衡理分析の出発点に登場する初期附存量が所与とされ、その水準自体経済学上説明を要するものではないのと同様である。しかし、メンガーは『原理』第二章においてわざわざ「支配可能量 (Die verfügbaren Quantitäten)」(第二節)<sup>20)</sup> を設けて、その拡張された意味を詳しく説明しているのである。

「特に分業の結果として交易が拡大発展し、人々がその需求の充足の大部分を交換に頼るようになるや否や、彼らは自ら、単に自分の所有財についてだけでなく、彼らと交換関係に立つ他のすべての人々の所有財についても知ろうとして熱心な興味を抱くものである。というのは、後者の所有財の少なからざる部分が、たとえ直接にではないとしても間接には(交換を通じて)彼らに支配可能になっているからである。」<sup>21)</sup>

このように他人の支配量をも「支配可能量」に含めることによって、支配可能量 = 0 は、考察中の経済人の支配量 = 0 という意味にとどまらず、社会構成員のうち、誰も支配していないこと、つまり、経済における存在量 = 0 という意味となる。存在していない物は財となることも、経済財となることもない。このようなメンガーによる意味の拡張は、個人レベルから社会レベルへの前提条件の拡張であり、経済財の定義として  $0 < \text{支配可能量}$  という条件を文章によって付け加えたものと理解される。

これによって、上述の齟齬は回避されたかのようである<sup>22)</sup>。とりわけ、ある経済人がそれまで支配していた経済財を消耗しつくして、ある個人のレベルで、手元に無くなったとしても、それは、社会レベルで彼の支配可能量 = 0 になったことを意味せず、他者と交換するなり、他者から購入できるかぎり、相変わらず彼にとって経済財でありつづけるのである。

### 3) 方法論的個人主義

では、メンガーは、財概念を規定するとき方法論的個人主義 (*methodological individualism*)<sup>23)</sup> の立場にたち、その次に経済財概念を規定するときには、社会を前提としているのだから、方法論的個人主義から離脱したのだろうか？その答えは、否である。

支配関係に置かれている状態を財の条件としていることは、ある個人を念頭においていることを意味する。「支配関係」とは物と個人との間で成立するからである。このように、メンガーは財を方法論上個人主義的に定義した。また「支配可能量」も、ある個人にとってのものである限り、個人主義的に定義されているといえよう。ただ、その意味として他者の支配下にあるものをも含める点で、つまり、支配可能量はその個人の支配関係におかれていなくてもよい点で、個人レベルにとどまらない。社会を前提としていることは確かである。しかしながら、社会を前提としていたとしても方法論上「個人主義的に定義する」ことは可能である。なぜなら「個人主義的に定義する」とは、個人を視点として定義することであり、その個人が他者から孤立して生活していようが、他者と密接に関わっていようが、個人を視点とすることに変わりはないからである。

しかし、第三節「人間経済の起源と経済財」で、個人主義的視点から離脱する。それは、同節の冒頭で、支配可能量 < 必要量という数量関係とその個人的認識から生ずる現象として、経済と経済財を定義した<sup>24)</sup>後、この「数量関係が社会についても発生するとき」と断った上である<sup>25)</sup>。その目的は、法学における所有権の起源を経済学的に説明することであった。社会的必要量を満たさない財を所有している人々を「ひきおこされる可能性のある他人の暴力行為から社会的に保護する必要性」<sup>26)</sup>から所有権が成立したのであり、この意味で、「人間の経済と所有権とは共通の経済的起源をもっている」<sup>27)</sup>という。このように、視点を個人主義から「普遍主義」<sup>28)</sup>にスイッチすることによってメンガーは隣接科学の基礎概念である「所有権」の起源を説明しているといえよう。ここで注目されるのは、ある法秩序の起源を説明するにあたって、方法論的個人主義の立場から離脱せざるをえなかった点である。これは、『原理』最終章の貨幣の起源論を予示するものであり、『原理』の出発点の段階ですでに方法論的個人主義にも限界があるという点をメンガー自身自覚していたことをしめしている。

### 4) 主観主義

このように、その限界についての自覚はあったにせよ、メンガーは、財を規定するときも、経済財

を規定するときにおいても、方法論的個人主義の立場を貫徹している。にもかかわらず、財条件論と経済財概念は相変わらず完全には調和していない。なぜなら、ある個人にとっての経済財とは、交換や購入や生産によって支配可能であればよいのだから、彼の支配下に置かれている必要はない。つまり、財の第四条件を満たしていないにもかかわらず「経済」という形容詞のついた財が存在することになってしまうのである。

この齟齬は、「支配関係」を主観化したために生じたものである。

財の第四条件「支配関係」、すなわち、ある物がある個人の支配下に置かれている状態とは、その個人にとって、主観的契機<sup>29)</sup>ではない。ある物がその状態に置かれているかどうかは、その個人自身の感覚や知識、それらに基づいた個人的な判断に従って決まるわけではないからである。ある個人がある物を支配していると主観的に判断したとしても、それが思いこみ<sup>30)</sup>にすぎない場合はしばしばおこりうる。メンガーはこの主観的であるかないかという視点を区別していたからこそ、第三条件の「因果連関の認識」という主観的契機の中に「支配関係」を含めずに、第四条件として独立させたといえよう。

それに対して、経済財の規定要因、すなわち、ある個人にとっての「支配可能量」とは、「われわれの欲望を満足させるのに必要な財数量」とともに、主観的契機である。なぜなら各個人は、それらを「明確に知っていなければなら」<sup>31)</sup>ず、「可能なかぎり精確に知ろうとして苦心」する<sup>32)</sup>ものであり、個人個人でそれぞれの知識は異なるからである。この意味でメンガーは、主観主義的視点に立脚して第二章第一節「必要量」第二節「支配可能量」を論じることによって経済財<sup>33)</sup>概念を規定したのである。

以上の考察から、メンガーが財と経済財とを規定する際に生じた不調和の背景の一つが明らかとなる。それは、「支配関係」と「支配可能量」との根本的相違であり、主観的契機であるかないかの相違であった。ここで興味深い点は、「支配関係」という質が主観的側面ではなく、「支配可能量」という客観的な数値として示される量が主観的側面として把握されていることである<sup>34)</sup>。いずれにしても、『原理』第一章で財を規定するとき、メンガーは、完全な主観主義者ではなく、第二章で経済財を規定するときに、その立場を徹底させたのである。実際、ある物が財となるための第一条件（欲望）と第三条件（因果関係の認識）は主観的契機であるが、第二条件（財の諸属性）と第四条件（支配関係）は、非主観的契機である<sup>35)</sup>。また「高次財の財性質は対応する補完財を支配しているという事情によって制約される」という命題を説明する第一章第三節 a)<sup>36)</sup>も、メンガー自身「客観的契機」として説明しているのであり、主観的契機を解説しようとしたものではないのである。

この点を念頭におくならば、オーストリア学派創始者メンガーの主観主義についての最近の発言「主観主義へのメンガーの関わりは、財の定義が示される『原理』開幕章から明白である」<sup>37)</sup>中の下線部分は、「経済財の定義が示される『原理』第二章において顕在化する。とりわけ、先行する開幕



章における財の定義における非主観的契機「支配関係」との齟齬をも顧みず示された点にその特徴がある」と、訂正されなければならないであろう。

メンガーの主観主義とは、ある個人の主観的欲望とその満足を経済学の出発点とするところ<sup>38)</sup>にだけその本質があるのではない<sup>39)</sup>。そもそも、主観的欲望とは、すでに見たように、メンガーにとって、経済学の出発点である財条件の一つにすぎなかった。むしろ、それと同等に列挙される第四条件「支配関係」という契機を主観化することにこそ、その本質が認められなければならないのである。すなわち、「支配下にあるかないか」という個人と物との関係を、その個人にとっての「支配可能量」という主観的知識・認識として把握し直すところに、メンガーの主観主義の核心があるのである。

では、以上のようなハイエクの主観主義<sup>40)</sup>を先取りした視点を、メンガーは『原理』の最後まで貫徹しているのだろうか？最近、モダン・オーストリアンの立場からカーズナーによって、メンガーの主観主義の不完全性が指摘されている<sup>41)</sup>。確かに、メンガーは、主観的知識・情報が完全ではあり得ないことを十分認識し、「対応する高次財を通じて支配される生産物の数量と品質に関する不確実性」<sup>42)</sup>として論じているものの、この不確実性を解消すべく「知識が絶えずやり取りされ獲得されるプロセスにたいする必要性を扱うべきである」というハイエクのアジェンダ<sup>43)</sup>を実行していないという意味においてメンガーの主観主義は不完全であった<sup>44)</sup>といえるかもしれない。しかしながら、こういった定式化における不完全さのみならず、メンガー『原理』における主観価値の概念規定と、限界効用概念の導出においてもまた、「支配関係への依存性」という非主観的契機が不可欠な役割を果たしているという意味で、彼の主観主義が完全であったとは言い難いのである。以下その点を確認しよう。

#### 4 - 1) 主観価値

価値が生じるのは非経済財においてではなく、経済財においてだけである。『原理』第三章「価値論」の冒頭で、この観点を説明したあと、メンガーは、フリートレンダー、クニース、ロッシャー、シェフレらの価値概念規定を吟味している。たとえばクニースの「人間の目的に役立つある財の適性の程度」<sup>45)</sup>という価値規定は広すぎることになる。豊富に存在する非経済財も人間の目的に役立ち用いられることがあるけれど、それが経済上の評価の対象となることはなく、したがって、それに価値が生じることはないからである。

先行するドイツ人経済学者の広すぎる価値規定<sup>46)</sup>に対して、メンガーは、「支配」に言及することによって、価値概念を次のように規定している。

「価値とは、具体的な財または具体的な財数量が、われわれにたいして獲得する意義、自分の欲望を満足させることがこれらの支配に依存していることをわれわれに意識させることによって、それらがわれわれにたいして獲得する意義である。」<sup>47)</sup>

この定義は大変回りくどいものである。ただ単に、財によって実現される欲望満足についての意義として価値を規定せず、わざわざ「支配に依存していること (*von der Verfügung über dieselben abhängig zu sein*)」という点を明示的に述べることによって冗長なものとなっている。この冗長さは、しかし、メンガーの価値論にとって欠くことのできないものであった。なぜなら、「支配関係に置かれた状態」という契機とは別に、「支配関係に置かれているかいないか」すなわち「支配関係への依存性」という新しい非主観的契機が、提出されなければならなかったからである。つまり、価値現象が経済人にとって問題となるのは、すでに支配関係に置かれた状態そのものにおいてではなく、その状態を実現しなければならないか、あるいはその状態が喪失してしまう場合であるという点をメンガーがはっきり認識し<sup>48)</sup>、その点を「依存性」として明示的に示さなければならなかったのである。

このように、価値を定義するにあたってメンガーは、支配関係をめぐる新しい非主観的契機を強調しているのだが、同時に、主観的契機を忘れたわけでない。それは「自分の欲望を満足させること」から出発しているのみならず、支配関係への依存性について「意識している (*uns bewusst sind*)」ことに言及している点に顕れている。少なくともこれら二つの主観的契機に着目している点で、確かに、メンガーの価値論は主観的であるといえよう。

しかしそれは、メンガーが『原理』の著述にとりかかった当初からそうであったわけではなかった。この点は、メンガー文書に残されている第一ノートブック(1867年9月12日付)に「価値は一財の使用に対する我々の依存性である」と記されている事実<sup>49)</sup>に確認できる。この命題中に「欲望満足」や「意義」や「意識」といった主観的契機はまったく見いだされない。それは、第二ノートブック(1867年9月18日付)における価値論の説明文「個人が自分の権力のもとにある諸物に対して持つ依存関係。依存関係のないものは価値がない」<sup>50)</sup>においても同様である。

このように主観的価値論にたどり着く前に、メンガーは、まず個人と物との「依存性」という契機からアプローチしていったのである。それが単なる日常言語ではなく術語としてもちいられたものであった点は、「財の一般的依存性」を( )付きで「価格」と言い換えている<sup>51)</sup>ことから明らかであろう。ただ、そこには、依存する対象としての「支配関係」というアイデアまで到達していないという未熟さがあった。確かに上で最後に引用した文章中の「自分の権力のもとにある」という状態は「支配関係にある」状態と同じであると解釈可能であろう。しかしここで明示的に「支配」という術語が用いられていない点と、「外界の諸部分に対する依存関係」(第一ノート<sup>52)</sup>)、「自分の欲望満足をそれがまさに依存しているところの財」(第二ノート<sup>53)</sup>)などの記述から、「外界」あるいは「外界の部分である財」への依存という観点に留まっているのであって、この段階では、「支配関係におくこと」に依存しているという認識にまでは到達していなかったというべきであろう。

『原理』の議論の流れから判断するならば、「支配関係」がまず財条件として提示され、その後に

「支配関係」をめぐる一つの関係性として「依存性」が価値規定において追加されている。しかし、以上の『原理』形成史研究の成果から知られるように、実は、メンガーの知性は「依存性」から出発して、その後に「依存する対象はなにか」という問いの答えとして「支配関係」という非主観的契機に到達したものと思われる。

このように『原理』の議論展開とは逆のコースを辿ってメンガーは、近代経済学史上輝かしい成果へとつながる手がかりを得た。それは、限界原理の導出である。いうまでもなくそれは個人の知識とか意識といった主観的な契機からなされたものではなく、支配関係への依存性という非主観的契機の操作、すなわち、支配関係の喪失という手続きによるものであった。

#### 4 - 2) 限界効用

「限界効用 (*Grenznutzen*)」という術語はメンガーのものではなく、ヴィーザーの『根源』をまたなければならなかった<sup>54)</sup>が、周知の通り、その内実はすでにメンガーによって導出されていた。そして特筆すべき点は、その導出が、ジェヴォンズやワルラスとは異なり、微分という数学的手法を用いずに、「豊作の農夫」<sup>55)</sup>という思考実験からなされたことである<sup>56)</sup>。収穫された穀物5袋の一つの価値が何によって決まるか、という問いに答えるためにメンガーの採用した方法は、一袋が無くなった場合を想定して、どの使用目的を諦めるかという点に着目するものであった。それを一般的に整理するならば、「支配関係」の喪失という手続きであり、後に「喪失原理 (*Verlustgedanke, loss principle*)」とよばれることになるものであった。

「もし経済主体がこの部分量を支配できないならば、いいかえれば、もし彼がその全支配量からこの部分量を控除した残額だけしか支配下にもたなくなるとすれば、どの欲望満足が実現されないことになるであろうか。」<sup>57)</sup>

それは、この経済主体が合理的であるかぎり、「なお残存する財数量をもって比較的重要さの小さい欲望を後回しにして比較的重要さの大きい欲望を満足させようとする」ので、「彼にとって最小の意義しかもたないもの」ということになる。この「最小の意義」こそこの財の限界効用に他ならない。このような考察からメンガーは次の命題として一般化する。

「支配可能な財数量の一部分量の価値は、この人にとっては、全数量によって確保され、また同一部分量をもってもたらされうる複数の欲望満足のうちでもっとも重要さの小さなものが彼にたいしてもつ意義に等しい。」<sup>58)</sup>

この命題に登場する「支配可能な財数量 (*verfügbare Gütermenge*)」とは、上で指摘されたいわゆる主観化された意味の「支配可能量」ではない。主観的知識としての財数量ではなく、単純に当該個人が「支配できている財集合」が問題とされているにすぎない。この点は後段で次のように繰り返される点からも明白である。「一経済主体の支配下にあるその財の全体数量の中の一定部分量の価値は、

支配下にある全数量によって確保され、またこの部分量によってもたらされうる欲望満足の中で、もっとも重要さの小さいものがこの主体に対してもつ意義に等しい。」<sup>59)</sup>

ここで明らかなのは、欲望満足についての主観的意義という契機以外には、経済財を規定するときに強調された支配可能量についての知識とか、価値を規定するときに強調された支配関係への依存性についての意識といった主観的契機がもはや登場しないということである。この点は、高次財の価値の大きさを説明するときにも確認される。メンガーは喪失原理を応用しつつ、次のようにのべる。「ある高次財の具体量の価値は、いずれの場合にもわれわれの支配しうる諸高次財の総体を経済的に使用するとして、その価値が問題となっている高次財の数量をわれわれが支配する場合に実現される欲望満足の意義と、そうでない場合に実現される欲望満足の意義との差に等しい。」<sup>60)</sup>

限界効用を導出する「喪失原理」がアリストテレスの『トピカ』に見いだされる<sup>61)</sup>けれども、メンガーが同著を読んだという確証は得られない<sup>62)</sup>といった議論よりも、むしろ重要なのは、「喪失」するものが「支配関係」であるという点にメンガーの注目していることであろう。また、メンガーにとって「支配関係」を『原理』の書き出しにおいて財の条件とした段階で、論理的否定として支配関係が喪失した場合を考察することは自然な流れであり、何らか偉大な先行著作を読むことによって得た発想として説明することは冗長のように思われる。

## 5) 資本と利子

メンガーは、高次財が財性質をもつために、その低次財生産に必要とされる補完財の支配とならんで、「経済主体が問題の経済財（高次財）を支配する期間は、その経済主体に生産を可能にするだけの長さにわたるものでなければならない」という条件をもって、資本を定義している<sup>63)</sup>。なぜなら、「経済主体が経済財の諸数量を支配するにしても、その期間があまりにも短い」と「諸財の生産性を発揮できない」からである。このような「場合には、この経済財の諸量は決して資本ではない。」このように、メンガーは資本を「支配関係」の期間として規定しようとした。

メンガーの資本概念は、このように、彼の『原理』の統一的視点から逸脱することなく規定されていたのであるが、しかしながら、1888年に公表された彼の論文「資本理論について」のなかでは、一切言及されることがなくなってしまう。これを彼の撤回とみるべきか否かは、現段階では決定できない。今後の研究課題とすべきであろう。ただ、その際に注目すべきは、同論文におけるメンガー独自の主張である。それは、彼が、アダム・スミスによって経済学に導入された生産された生産手段としての資本、さらにバームによって継承・発展させられた中間生産物の総体という資本概念を批判し、それに対して、スミス以前から存在する実務家たちの用いている貨幣額としての資本概念の重要性を強調している点である。この強調の背景には、生産活動に投じられた貨幣額の経済的役割と、経済活動に必要な資源の支配との関連性を探求しようというメンガーの課題があったのかもしれない。

一方、利子の概念についてもメンガーは、「支配関係」に一つの見なしを実行することによって、統一性を維持している。それは「資本利用の支配可能数量がその必要量よりちいさなところではどこにおいても、一定期間内における経済財数量の支配は・・・経済財である」<sup>64)</sup>という見なしである。これによって、利子とは一定期間の資本利用（支配）に対する対価として説明されることになる。この利子学説は、バームによって「利用説」と命名され、徹底的に批判されるに至る。その経緯と評価は、別稿をもって明らかにされなければならない<sup>65)</sup>。

## 6) 商品と貨幣

『原理』最終2章も「支配関係」という契機によって貫かれている。その基礎概念は「商品」と「貨幣」である。商品の概念をメンガーは、財を「支配関係」に置く人と財との関係性として把握している。「・・・学問的意味の商品概念から同時に明らかになるのは、商品としての性格 (*Waarencharakter*) が何か財に付着したもの、その属性ではなくて、単に財がその支配者にたいしてもつ特別な一関係、その消滅とともに商品としての性格自体が失われてしまうような一関係にすぎないということである。」<sup>66)</sup> この関係性による把握の仕方は、価値把握のそれと同一である。つまり、財価値とは財に内在したものではなく、「財と我々の欲望との関係に基づくものであって、財そのものにもとづくのではない。この関係の変化にともなって、価値もまた発生し消滅しなければならない。」<sup>67)</sup> これが『原理』の前半と後半の間に確認されるメンガーの一貫した方法の一つなのである。

そして、商品は、それが販売される他者との関係性によって、一つの特性を持つ。それが商品の販売可能性 (*Absatzfähigkeit*) である。これは、経済人がある商品を支配関係に置いたとしても、その商品について彼自身が主観的に決定することのできない性質であり、彼以外の社会構成員の規模や好みや必要性によって決まってくるものである<sup>68)</sup>。見方を変えれば、これは他者の欲望を直接知ることはできないのであって、それに代わる新しい客観的契機として提出されたものが商品の「販売可能性」なのである<sup>69)</sup>。この特性が何に依存するかについて詳述するために『原理』第七章が当てられている。

そして、「販売可能性」のもっとも高い商品<sup>70)</sup>が、貨幣として流通するのである。もちろんここでメンガーが念頭においている「貨幣」とは現代の法制化された通貨ではない。国家的権力によって認証される以前から存在してきた交換手段を念頭においている。つまり、人間社会の初期段階から一定の商品が貨幣として存在してきたのであり、それは、経済的諸関係から自然的にうまれてきたのである<sup>71)</sup>。これがいわゆる貨幣の起源論である。メンガーは、ここでまず、物々交換に伴う不便さを解消するために比較的販売可能性の大きな他の商品と交換することの「利益の認識」<sup>72)</sup>という主観的契機に着目する。確かに、この認識は一国民の全成員の間に同時に発生するものではなく、最初のうちは一部の経済主体だけに生じるであろう。それが長期間のうちに習慣を通じて、全成員の間に広がっ

てゆく。成員間の合意とか法的強制が無いなかで、もっとも販売力の大きな商品が貨幣として析出される。「もっとも販売可能性が大きい」という契機はもはや主観的なものではなく、この国民に共通の客観的なものである。

「販売可能性」の概念については、すでに根岸によって、メンガーがノン・ワルラシアン経済学を展開しようとした最初の試みとして高く評価されている<sup>73)</sup>。それは同概念が、市場の組織化の程度を反映したものであり、ワルラス経済学が前提とする完全競争市場以外の市場状況をも考慮しようとした、よりリアリスティックなものと考えられる。さらに根岸は、メンガーの販売可能性という考え方がマクロ経済学のミクロ的基礎へとつながるものという解釈を示している。この論点の方向性は、本稿のそれと合致するものと思われる。メンガーが「支配」というミクロレベルの関係性から「貨幣」といったマクロレベルの社会経済現象を説明しようとしていた点、そして、その過程で「販売可能性」という考えが提出された点は本節で明らかにされたとおりである。ただ、個人と物との「支配関係」を他者との関係性に拡張するために「販売可能性」という概念が導出された点は、他のメンガー研究と同様に指摘されていない。そこで次節では、メンガーが『原理』において「支配関係」をその統一軸として意識的に論じている点を指摘しよう。

## 7)『原理』統一軸としての「支配関係」

「支配関係」が、メンガー『原理』の前半と後半を結びつける概念であることは、その第六章において確認できる。この章は、近代経済学では見かけることのなくなった「使用価値と交換価値」というタイトルを持ち、古典派の議論の名残ではないかという印象を与える。かつてスミスは商品の価値には使用価値と交換価値の二種類があり、必ずしも両者がパラレルに増減するとはかぎらないから区別すべきだし、使用価値は交換価値を説明できないと主張した<sup>74)</sup>。ジェヴォンズは『経済理論』の中でスミスによる水とダイヤモンドの例の説明箇所を直接引用し、古典派がなぜ効用理論ではなく労働価値説を採用したのか、という問題にたいする説明を行っている<sup>75)</sup>。しかしながらメンガーは、ジェヴォンズのように、イギリス古典派の限界を説明するためにこの章を設けたわけではなく、新しい読替えを提示することを目的としていたのである。

商品の側から論じたスミスに対して、メンガーは、「経済活動する個人」という観点から次のように考えた。ロビンソン・クルーソー<sup>76)</sup>のような一個人しか存在しない経済において、彼は、物をその使用価値のためだけに支配する。ひとたび、大勢の他者が存在する社会において経済活動するようになれば<sup>77)</sup>、ある個人は、物を自分にとっての「使用価値」だけでなく、他者との「交換価値」のために支配するようになる。このようにメンガーは、使用価値と交換価値の区別を、「ある経済人がある物を支配関係に置く目的は何か」という観点で把握し直したのである。

「発展した文化状態のもとでも、直接に使用してわれわれが欲望の満足という効果が得られるよ

うな財を所有することにより、経済主体が欲望の満足を確保できることは確かに前と変わらないであろう。しかし同じ効果が、問題の欲望を直接に満足させるのに必要な上述の財と取り替えることに経済事情の点から適した財を支配するという間接的な方法によっても生み出されるのである。」<sup>78)</sup>

この読替によってメンガーは『原理』前半の方法論的個人主義に基づいて分析した一経済人の行動原理を、彼が意図しないにもかかわらず形成される社会制度の説明に応用しようと考えた。経済人は、物との支配関係によって、社会あるいは他者と関わり、この関わりを通じて個人の原理が社会現象の基礎となるというわけである。もちろん支配関係そのものは、経済人の意図を反映するけれども、その結果自体は経済人の意図したものとはかぎらない。ある商品を交換目的に支配する決定を個人は下せるが、その販売可能性をコントロールすることはできない。競争市場における価格と同様、社会構成員である他者の利害と支配関係の合成果として、商品の販売可能性が決まり、その最大の販売可能性をもつ商品が貨幣として成立するのである。ここに「支配関係」への着眼によって、個人の意図せざる社会制度成立のメカニズムの一つを明らかにしようとした新たなメンガー像が顕れてくるのである。それは「欲望満足」という主観的契機だけではなしえなかったものなのである。<sup>79)</sup>

### 結語

以上によりメンガーが「経済主体と物との支配関係」という非主観的契機を統一軸として『原理』を著述していることが明らかとなった。この特徴は、本論で見たとおり、メンガーの『原理』のテキストにおいて「支配 (Verfügung)」「支配する (verfügen)」「支配可能な (verfügbar)」という表現が頻出することから、容易に見いだされるべきものであったはずである。しかしながら、なぜ今までおびたしいメンガー研究書においてそれが指摘されてこなかったのだろうか。例えば、メンガー継承の第一人者であるハリエクは、LSEの経済学古典叢書シリーズでメンガー著作集の編集にあたって序文を著述したとき、本稿で着目した点について言及することはなかった。さらに、そのほぼ半世紀後の1971年6月にウィーンで開催されたメンガー『原理』出版100周年記念シンポジウムにおいて、「経済学史におけるメンガーの位置づけ」と題する報告をおこない、そのなかで、メンガーの『原理』が役に立つ物からはじまって貨幣に至る統一性をもっている点を指摘してはいるものの、残念ながら「支配関係」という概念がその統一の背後にあることに言及していない。

「有用な物、財、稀少性あるいは経済財といったものの「特性」を丹念に検討したメンガーは、商品の販売可能性の定義へと進み、最終的には貨幣にたどり着いた。あらゆる段階でメンガーは、・・・こういった特性がいかに（１）行為する個人の欲望に依存しているか、（２）この欲望の満足がこの特定の物に依存させられている事実や状況についての知識に依存しているか、ということを強調している。」<sup>80)</sup>

この引用中の下線部分において「支配」という契機がドロップしている点に、従来のメンガー解釈<sup>81)</sup>の限界が典型的に示されているのである。つまり、メンガーに忠実であれば、「この欲望の満足が特定の物を支配下に置くことに依存させられている事実や状況についての知識」と要約しなければならなかった。すでに本稿で明らかにした通り、メンガーにとって「支配」という契機は『原理』に登場する財、経済財、限界効用、資本、利子、商品といった概念規定によって決して省略可能なものではなかったのである。

ベームやヴィーザーといったオーストリア学派の他の創始者と比べて、メンガー『原理』で展開されているさまざまなヴィジョンやアイデアがはるかにユニークであることを、ハイエクとともに強調するシュトライスラー<sup>82)</sup>も、残念ながら、「支配関係」の重要性に気が付いていないようである。メンガーに先行するドイツ語圏経済学の影響を探查するとき<sup>83)</sup>、彼の視点から「支配関係」という客観的契機がどこからきたのか、という問題意識は、完全に欠落しているからである。

ハイエク以降のメンガー研究が、「支配関係」に注目するに至っていない原因のひとつは、デューク大学パーキンス図書館に寄贈されたメンガー文書である。これらの遺稿類に「支配関係」を積極的に取り上げて論究したものはみあたらない<sup>84)</sup>。すでに本論でみたように、メンガーのノートの中に「個人と物との依存性」という観点は登場するが、「支配関係に依存する」という点まで明示的に展開されていない<sup>85)</sup>。また、今ひとつの原因は、メンガーの『経済学方法論』に同概念の内容および意義がまったく論じられていないことである。おそらくこのような資料状況と『原理』の成立・展開状況のために研究者の関心が同概念に向かわなかったものと思われる。

さらに、学史家のみならず、現代経済学の立場からも「支配関係」という概念に拘泥する必要のないことがメンガーの「支配関係」を忘却の彼方に追いやってしまったように思われる。それは、解析学の手法が経済分析に応用されることによってである。効用関数  $U = U(X)$  の存在を前提することから出発してしまえば、 $X$  という量は、消耗した量なのか手元に置いている量なのか念頭においている量なのか詮索する必要はない。むしろ分析の意味を保証するために  $U$  の満たすべき条件（「連続性」とか「凸性」等々）についての考察と定式化へと進むことがもとめられるのである。もちろん、たいへん興味深いことに、効用は  $X$  という量に依存するというミクロ経済学の出発点は、メンガーの最初期の出発点「依存性」と重なる。しかしその後の両者は、まったく別々の航路を辿ることになる。少なくともメンガーは、 $X$  という量が個人にとっていかなる関係におかれたものでなければならないかという点について熟考を重ねた結果「支配関係」という概念に到達したのであった。現段階で、何らかの先行例によって導かれたのか、それともメンガー自身の直感の産物であったのかについて断定できない。それは今後のさらなる研究によって解明されなければならないであろう。



## 注

- 1) これは、社会科学古典資料センターの山崎教授を研究代表者とする科研費プロジェクト「メンガー『国民経済学原理』初版特製本における書き込みの復刻とその内容分析」(基盤研究(C01): 課題番号 14530004)の成果に関する中間報告を兼ねて開催された。同プロジェクトは同センターに所蔵されているメンガー文庫にあるメンガー自身の『国民経済学原理』特製本の復刻とその内容の再評価を目的とするものである。筆者は、同プロジェクトの共同研究者として参加し、2003年3月にパリで開催された共同研究者の研究会において Menger's view on individual and society を報告した。本稿はその段階では到達していなかった筆者の新しい解釈を提示するものである。
- 2) その改訂の契機は、2005年6月9日にスコットランドの Stirling 大学で開催されたヨーロッパ経済史学会大会における報告準備であった。この報告に対し本学から国際学会報告への出張資金の補助を受けた。
- 3) 橋本名誉教授のこれまでの復刻研究の成果もアップロードされている。
- 4) <http://www.kyoto-su.ac.jp/~tomo/ORCtop.htm>
- 5) ジェヴォンズの『経済学理論』、ワルラスの『純粹経済学要論』とともに「限界革命」の「中心的構成要素の一つ」とされる。Kirzner, Israel M. (1987) p. 146
- 6) Leube, Kurt R. ed. (1995) などは典型例であろう。
- 7) Menger, Carl (1871) S. 173 - 安井・八木訳 (1999) p. 149
- 8) Streissler, Erich W. (1973) - Hicks, J. R. and Weber, W. ed. (1973) p. 167
- 9) 林 (1966) は、第三部でメンガーの『国民経済学原理』の体系的構成を扱っている。しかし、そこで論じられている内容は、『原理』の前半と『方法論』との関係のみであり、『原理』後半との体系性についての言及はまったくみられない。
- 10) *alles dasjenige, was zur Befriedigung eines wahren menschlichen Bedürfnisses anerkannt brauchbar ist* (Roscher, Wilhelm Georg Friedrich (1864) S. 1) この箇所がメンガー自身によって引用されている (Menger, Carl (1871) p. 2 - 安井・八木訳 (1999) p. 4, 脚註最後) 点は、Mises や Streissler や Ikeda によって強調されている。Mises, Ludwig Edler von (1933) S. 161, Streissler, Erich W. (1990) - Caldwell, Bruce J. ed. (1990) p. 43, Ikeda, Yukihiro (1995) p. 32.
- 11) Menger, Carl (1871) S. 10
- 12) Menger, Carl (1871) p. 17
- 13) 『原理』の開幕章から生産財の評価の問題が扱われている点を的確に強調しているのは、ハチソンであった。Hutchison, Terence Wilmot (1953) p. 140
- 14) このテキストは、Ikeda (1995) p. 31, Ikeda (1997) S. 172 に引用紹介されている。この箇所を、ロッシヤーが選好の多様性を認識していなかった点にメンガーが気づいた上で批判しているという意味でメンガーが主観主義の第一歩を記しているという池田解釈には賛成できない。むしろこの箇所は、欲望とは何かという困難な問題に直面して、その内実を論ずるよりも、その満足のために、経済上何が依存しているかという問題を考察することへ導かれる第一歩であったというべきであろう。
- 15) Böhm-Bawerk, Eugen von (1881) - Weiss, Franz Xavier ed. (1924) p. 19 この点は、Stirling での学会席上、シェフォルト教授から質問された点でもあった。なお、本稿で論じたメンガーの財論とバームのそれとの相違および解釈について 2005 年 11 月にワシントンで開催される南アメリカ経済学会第 75 回大会で

報告された。Tomo (2005) 11/

- 16) Menger, Karl ed. (1923) S. 11 - 八木・中村・中島訳 (1982) p. 2
- 17) Menger, Carl (1871) S. 3 - 安井・八木訳 (1999) p. 5
- 18) 以下の説明から明らかな通り、従来の邦訳「所有財」よりも文字通りの「財所有」のほうがより適切ではないかと思われる。
- 19) Menger, Carl (1871) S. 30. - 安井・八木訳 (1999) p. 27
- 20) Menger, Carl (1871) S. 45ff. - 安井・八木訳 (1999) p. 40 f. この節において、支配可能量についての説明に先行して「人間の行為の成功を決定する第一の契機」として「先慮的行為」に言及している。これは、メンガーが財の第四条件にまつわる問題を「人間行為」という同一視点から考察していたことを示している。
- 21) Menger, Carl (1871) S. 47 - 安井・八木訳 (1999) pp. 41 - 42
- 22) それは完全なものではなかった。その点については後段の「主観主義」で説明される。
- 23) 同名称はシュンペーターによって周知となったのであってメンガー自身が用いているわけではない。しかし、この立場がメンガー自身のいわゆる「原子論的方法 (*atomistic method*)」に対応している点は、ハイエクによって指摘されている。Hayek, Friedrich August von - Hicks, J. R. and Weber, W. ed. (1973) p. 8
- 24) Menger, Carl (1871) S. 51 - 安井・八木訳 (1999) pp. 45 - 47
- 25) Menger, Carl (1871) S. 55 - 安井・八木訳 (1999) p. 49
- 26) 同上
- 27) 同上
- 28) 個人ではなく、社会全体からの視点を要約した表現として、「全体主義」や「社会主義」が不適切であることは、これらの持つ日常言語上の意味から明らかであろう。「普遍主義 (*Universalismus*)」を「個人主義 (*Individualismus*)」に対比させて強調したのは、シュパンであった。シュパンの「普遍主義」概念の成立史については拙稿を参照せよ。塘 茂樹 (2002)
- 29) ここで「客観的契機 (*Objektives Moment*)」といたいところである。実際、主観と客観の対比は、「使用可能性は客観的であり、価値は主観的である」という形ですでにシェフレの『国民経済学の価値論における倫理的側面』(Schäffle, Albert Eberhard Friedrich (1862) S. 10) の中に登場し、メンガー自身、その点に言及している (Menger, Carl (1871) S. 79)。また「客観的契機」という表現は、「それぞれの場合にどんな具体的な欲望の満足が一定財に対するわれわれの支配にかかっているか」という課題についてメンガー自身が用いている。Menger, Carl (1871) S. 95 - 安井・八木訳 (1999) p. 76。さらに、「客観的契機が主観的契機となる」というメンガーの視点は、『原理』著述のために準備された 25 冊のノートの最初に登場することが、すでに明らかにされている。(八木 (2004) p. 63) しかしながら、二人以上 (*inter-subjective*) の判断を前提とするポッパーの客観性の定義に従うと、「客観的」といえなくなってしまう。それはロビンソン・クルーソー経済という一人しか存在しない経済もメンガーは念頭に置いているので、そこにおいて生じた「支配関係」が客観的であるかどうか判断できなくなってしまうからである。
- 30) 人間の想像だけで財として扱われる「想像財」にメンガーが言及していることは周知のことであろう。Menger, Carl (1871) S. 4 - 安井・八木訳 (1999) p. 6

- 31) Menger, Carl (1871) S. 35 - 安井・八木訳 (1999) p. 31 メンガーはこれを人々の先慮の前提としての「二重の認識」と呼ぶ。
- 32) Menger, Carl (1871) S. 46 - 安井・八木訳 (1999) p. 41
- 33) そしてそれは「稀少性」概念でもあった。ハイエク (Hayek, Friedrich August von (1934) S. 14) やナイト (Knight, Frank Hyneman (1950) p. 13) によって繰り返し指摘されているように、メンガーは「稀少性」という用語を用いてはいない。その理由は、彼が「稀少性」という表現のもつ客観的意味合いを嫌ったからかもしれない。「支配可能量」 < 「必要量」という「稀少性」の数量関係式の左辺も右辺も、メンガーは個人個人の主観的情報として把握していたのであって、財の客観的特性として考えてはいなかったのである。
- 34) この点は、いわゆるメンガー表の数値を説明する箇所においても見いだされる。同表は、「個々の欲望満足の意義の大きさ」(主観的契機)(Menger, Carl (1871) S. 88ff - 安井・八木訳 (1999) pp. 77 - 82) という節の中でなされている。
- 35) ミーゼスも、主観価値の基本問題を論じる際、メンガーの財4条件に言及し「第4条件はここで我々の関心対象ではない」と述べ、主観的契機ではないという判断を下している。Mises, Ludwig Edler von (1933) S. 161
- 36) Menger, Carl (1871) S. 11ff - 安井・八木訳 (1999) p. 11f
- 37) Caldwell, Bruce J. (2004) p. 25
- 38) 社会的平均労働時間という客観的要素を価値の源泉とする古典派の労働価値説に対して、効用あるいは欲望とその満足という主観的要素を価値論の基礎に置く立場を第一番目の主観主義として整理したのは、Littlechild であった。Littlechild, Stephen (1983) p. 39
- 39) 常識的に、「労働価値説あるいは生産費説に基礎を置いた古典派経済学を批判し、限界効用 = 主観価値理論に基づく新しい経済学大系を樹立しようとする試み」(経済学史学会編『経済学史思想史辞典』)としてメンガーの立場を解釈するだけでは、メンガーの主観主義やそのハイエクとの連続性を理解する上で不十分であるといえよう。
- 40) 「個人が異なれば知っている事柄も異なる」という事実を強調するものとしてハイエクの主観主義を要約したのは Littlechild であった。これを第三番目とする主観主義の5分類については、Littlechild, Stephen (1983) p. 39 を参照せよ。ハイエクが1945年論文以降このメンガーの主観主義を強調したのに対して、ベームやヴィーザーなどはかならずしもそうでなかったという点は、シュトライスラーによって指摘されている。Streissler, Erich W. (1972) - Black, Coats, and Goodwin ed. (1973) p. 167
- 41) Kirzner, Israel M. (1995 - 2000) p. 43ff
- 42) Menger, Carl (1871) S. 21 - 安井・八木訳 (1999) p. 20 ff
- 43) Hayek, Friedrich August von (1945 - 1949) p. 91
- 44) Kirzner, Israel M. (1995 - 2000) p. 44
- 45) Menger, Carl (1871) S. 78 - 安井・八木訳 (1999) p. 68
- 46) もちろん、シェフレがその後期の著作において非経済財に価値を帰することができない事実を取り上げている点を指摘することをメンガーは忘れてはいない。Menger, Carl (1871) S. 79 - 安井・八木訳 (1999) p. 69.
- 47) Menger, Carl (1871) S. 78 - 安井・八木訳 (1999) p. 68. ベームは、主観価値論の代表例としてこの定義

を直接引用して紹介している。London School of Economics ed. (1932) p. 12

- 48) この点は、「ある財がわれわれにとって価値を持つという状況は、すでに見たように、それを支配することが、われわれにとってある欲望を満足するという意義をもっている点に由来する。というのも、その財を我々が支配していない場合、その欲望満足以に備えられなくなってしまうからである」( Menger, Carl (1871) S. 85 ) という発言からも明らかであろう。
- 49) 八木 紀一郎 (2004) p. 45
- 50) 八木 紀一郎 (2004) p. 44
- 51) 同上
- 52) 八木 紀一郎 (2004) p. 63
- 53) 八木 紀一郎 (2004) p. 44
- 54) Wieser, Friedrich Freiherr von (1884) S.128
- 55) Menger, Carl (1871) S. 96 - 安井・八木訳 (1999) p. 83
- 56) 不確実性がなく完全情報のもとで行動する経済人を目的関数を最大化する意志決定問題として扱い、その均衡解として限界条件を導出する理論家を「限界主義者」と呼ぶならば、メンガーは限界主義者ではなかった、と指摘したのはシュトライスラーであった。Streissler, Erich W. (1972) - Black, Coats, and Goodwin ed. (1973) p. 160
- 57) Menger, Carl (1871) S. 98 - 安井・八木訳 (1999) p. 85
- 58) Menger, Carl (1871) S. 98 - 安井・八木訳 (1999) p. 86
- 59) Menger, Carl (1871) SS. 107 - 8 - 安井・八木訳 (1999) p. 93
- 60) Menger, Carl (1871) S. 142 - 安井・八木訳 (1999) p. 122。ここでメンガーは具体的な例を挙げて説明しているものの、具体的にその差の計算例は示されていない。これは第一次財 (消費財) のケースとの大きな違いであると同時に、その後帰属理論をめぐる弟子達の対立を誘発することになる。この点については稿をあらためて論じることしよう。
- 61) Oskar Klaus (1905), Emil Kauder (1953), (1965) p. 16
- 62) Spengler, Joseph J. (1955), Silverman, Paul (1990)
- 63) Menger, Carl (1871) S. 131 - 安井・八木訳 (1999) p. 114
- 64) Menger, Carl (1871) S. 132 - 安井・八木訳 (1999) p. 113
- 65) 部分的には、拙稿 Tomo (1994) を参照せよ。また、「支配」概念に関してメンガーは実在論者であり、バームが唯名論者であったという解釈は、Tomo (2005) 6/において示された。
- 66) Menger, Carl (1871) S. 232 - 安井・八木訳 (1999) pp. 199 - 200
- 67) Menger, Carl (1871) S. 85 - 安井・八木訳 (1999) p. 74
- 68) メンガーは、販売力を限定付ける 4 つの状況を説明している。
- 69) シュトライスラーは、これを商品の「流動性 (liquidity)」と同一視している。Streissler, Erich W. (1972) - Black, Coats, and Goodwin ed. (1973) p. 170。販売可能性が「客観的」であるといえるのは、いうまでもなく、この概念が二人以上の存在を前提としているからである。
- 70) Menger, Carl (1871) S. 233 - 安井・八木訳 (1999) p. 222
- 71) Menger, Carl (1871) S. 259 - 60 - 安井・八木訳 (1999) pp. 226 - 7
- 72) Menger, Carl (1871) S. 233 - 安井・八木訳 (1999) p. 222

- 73) Negishi, Takashi (1994) p.176. この点については本稿査読にあたられた審査委員からの示唆を与えられた。
- 74) Adam Smith - Campbell, R. H. and Skinner, A. S. ed. (1981) p. 44
- 75) Jevons, William Stanley (1879-1965) p. 79
- 76) Menger, Carl (1871) S. 103: 「我々のロビンソン」という表現をメンガーは用いている。
- 77) メンガーは、この対比を「孤立した経済」「孤立した個人」「孤立した人間」と「より高度な文化状態」といった様々な表現で言及している。Menger, Carl (1871) pp. 30, 31, 55, 64, 80, 102, 106, 155, 225。
- 78) Menger, Carl (1871) S. 213 - 安井・八木訳 (1999) p. 185
- 79) メンガーが「欲望論」ではなく「財論」から『原理』を書き始めたことは、「支配関係」がその統一軸であったという理解からすれば当然のことであり、この意味で、彼の死後息子によって出版された第二版 (Menger, Karl ed. (1923)) の編集方針に疑問を抱かざるを得ない。その開幕章は「欲望論」で始まっているからである。
- 80) Hayek, Friedrich August von (1973) - Hicks, J. R. and Weber, W. ed. (1973) p. 6
- 81) 「メンガーは、自分の理論とは、主観的効用を考察することが経済価値の決定において一意かつ排他的 (*unique and exclusive*) な役割を果たしていることを論証しているのだ、と見ていた」という新ボウルグレイブ経済学事典の説明もその代表的な例であろう。Kirzner, Israel M. (1987) p. 146.
- 82) Streissler, Erich W. (1972) - Black, Coats, and Goodwin ed. (1973) p. 162. 2003 年 9 月に報告 (Tomo (2003)) を行うためワシントンのジョージ・メイソン大学を訪れた際、同大学の教科書売り場で、メンガー『原理』の英訳が多数山積み販売されているのに驚かされた。現代のオーストリアンを代表する一人であるベッキ教授の授業で参考図書として指定されているからであった。
- 83) Streissler, Erich W. (1990). ロッシャーをはじめとするドイツ語圏経済学のメンガー『原理』への影響については、Ikeda, Yukihiro (1997) を参照せよ。
- 84) デューク大学のパーキンス図書館に 1987 年にメンガーの孫娘によって寄付されたメンガーの遺稿は、「メンガー文書 (the Menger Papers)」としてマイクロ化され容易に閲覧可能になっている。ハイエクは、個人的にその公表以前に閲覧した代表的メンガー研究者の一人であった。公表後、そのおおよその内容は、1989 年 4 月に開催されたメンガーコンファレンスの報告集 (Caldwell, Bruce J. ed. (1990)) において紹介されている。同資料の分析成果の一部は、Yagi, Kiichiro (1993), Ikeda, Yukihiro (1995), (1997), 八木 (2004) 等々に見いだされる。
- 85) この点は、ノートと『原理』との間に「支配関係」概念の導入という大きな展開が存在したことを示唆している。これは今後解明すべき重要な課題であるといえよう。

## 参考文献

- Black, Coats, and Goodwin ed. (1973) *The Marginal Revolution in Economics: Interpretation and Evaluation*. Papers presented at a conference held at the Villa Serbelloni, Bellagio, Italy, August 22-28, 1971, Duke University Press, Durham and London
- Blaug, Mark ed. (1991) *Aristotle (384 - 322 BC) Pioneers in Economics*. Edward Elgar Publishing Ltd.
- Böhm-Bawerk, Eugen von (1881) *2/ Rechte und Verhältnisse vom Standpunkt der Volkswirtschaftlichen Güterlehre*, Innsbruck [NB: MON. 315, in: Weiss, F. X. ed. (1924) SS. 1 - 126 trd. into Eng. by Huncke,

- George D. 'Whether Legal Rights and Relationships are Economic Goods' in: Nymeyer, Frederick ed. (1961) pp. 25 - 138]
- Caldwell, Bruce J. ed. (1990) *Carl Menger and his legacy in economics*. Annual supplement to volume 22, *History of Political Economy*, Duke University Press, Durham and London
- Caldwell, Bruce J. (2004) *Hayek's Challenge. An Intellectual Biography of F. A. Hayek*. The University of Chicago press.
- Dingwall, James and Hoselitz, B. F. tr. (1950) *Principles of Economics*. with an Introduction by Frank H. Knight, replaced with Hayek's Introduction in 1981, Free Press [Menger, Carl (1871)]
- Hayek, Friedrich August von ed. (1934) *The Collected Works of Carl Menger* I - IV
- Hayek, Friedrich August von (1934) Einleitung [Hayek, Friedrich August von ed. (1934), Bd. I pp. 7 - 36]
- Hayek, Friedrich August von (1945) The use of Knowledge in Society, *American Economic Review*, vol. 35, pp. 519 - 520 [Hayek, Friedrich August von (1949), pp. 77 - 91]
- Hayek, Friedrich August von (1949) *Individualism and Economic Order*, London
- Hayek, Friedrich August von (1973) The Place of Menger's *Grundsätze* in the History of Economic Thought [Hicks, J. R. and Weber, W. ed. (1973), pp. 1 - 13]
- Hayek, Friedrich August von (1981) Carl Menger [Dingwall, James and Hoselitz, B. F. tr. (1981), pp. 11 - 36]
- Hicks, J. R. and Weber, W. ed. (1973) *Carl Menger and The Austrian School of Economics*, Oxford University Press.
- Hutchison, Terence Wilmot (1953) *A Review of Economic Doctrines 1870-1929*, Oxford
- Ikeda, Yukihiko (1995) Carl Menger in the 1860s: Menger on Roscher's *Grundlagen* [Meijer, Gerrit ed. (1995), pp. 25 - 39]
- Ikeda, Yukihiko (1997) *Die Entstehungsgeschichte der Grundsätze Carl Mengers*, Scripta Mercaturae, St. Katharinen
- Jevons, William Stanley (1879) *The Theory of Political Economy*, 2nd edition
- Kauder, Emil (1953) 9/ Genesis of the Marginal Utility Theory. From Aristotle to the End of the Eighteenth Century, *The Economic Journal*, vol. 63, pp. 638 - 650 [Blaug, Mark ed. (1991), pp. 42 - 54]
- Kauder, Emil (1965) *A History of Marginal Utility Theory*, Princeton
- Kirzner, Israel M. (1987) Austrian School of Economics, *The New Palgrave: A Dictionary of Economics*, vol. 1, pp. 145 - 151.
- Kirzner, Israel M. (1995) The Subjectivism of Austrian Economics [Meijer, Gerrit ed. (1995), pp. 11 - 22] [Kirzner, Israel M. (2000), pp. 41 - 53]
- Kirzner, Israel M. (2000) *The driving force of the market*, Routledge, London & New York
- Knight, Frank Hyneman (1950) Introduction [Dingwall, James and Hoselitz, B. F. tr. (1950), pp. 9 - 35]
- Kraus, Oskar (1905) Die Aristotelische Werttheorie in ihren Beziehungen zu den Lehren der modernen Psychologenschule, *Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft*, Bd. 61
- Leube, Kurt R. ed. (1995) *Die Österreichische Schulde der Nationalökonomie*. Texte-Band 1 von Menger bis Mises.
- Littlechild, Stephen (1983) Subjectivism and Method in Economics [Wiseman, Jack ed. (1983), pp. 38 - 49]

- Littlechild, Stephen ed. (1990) *Austrian Economics*, 3 vols. Edward Elgar
- Meijer, Gerrit ed. (1995) *New Perspectives on Austrian Economics*, Routledge, London & New York
- Menger, Carl (1871) *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre* W. Braumuller, Wien
- Menger, Carl (1888) Zur Theorie des Kapitals, *Jahrbücher für Nationalökonomie und Statistik*, Bd. 17, SS. 1 - 49 [Hayek, Friedrich August von hrg. (1934) Bd. 3, SS. 133 - 183]
- Menger, Carl (1892) On the Origin of Money, *The Economic Journal*, vol. 2, pp. 239 - 255 [Littlechild, Stephen ed. (1990) vol 2. pp. 179 - 195]
- Menger, Karl ed. (1923) *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre von Carl Menger*. Zweite Auflage. Mit einem Geleitwort von Richard Schüller. Aus dem Nachlass Herausgegeben von Karl Menger. Hölder-Pichler-Tempsky A. G., Wien
- Mises, Ludwig Edler von (1933) *Grundprobleme der Nationalökonomie*, Verlag von Gustav Fischer
- Negishi, Takashi (1994) *The History of Economics. The Collected Essays of Takashi Negishi*, Vol. II Edward Elgar
- Nymeyer, Frederick ed. (1961) *Shorter Classics of Eugen von Böhm-Bawerk*, Volume I Libertarian Press South Holland Illinois.
- Roscher, Wilhelm Georg Friedrich (1864) *Grundlagen der Nationalökonomiek*, 5. Aufl., Stuttgart
- Schäffle, Albert Eberhard Friedrich (1862) *Über die ethische Seite der nationalökonomischen Lehre vom Werthe*, Tübingen
- Silverman, Paul (1990) The cameralistic roots of Menger's achievement [Caldwell, Bruce J. ed. (1990), pp. 69 - 91]
- Spengler, Joseph J. (1955) 4/ Aristotle on Economic Imputation and Related Matters, *The Southern Economic Journal*, vol. 21, pp. 371 - 389, in: Blaug, Mark ed. (1991), pp. 55 - 73].
- Streissler, Erich W. (1972) To What Extent Was the Austrian School Marginalist? *History of Political Economy* vol. 4, 426-61 [Black, Coats, and Goodwin ed. (1973), pp. 160 - 175]
- Streissler, Erich W. (1973) Menger's Theory of Money and Uncertainty - a Modern Interpretation [Hicks, J. R. and Weber, W. ed. (1973), pp. 164 - 189]
- Streissler, Erich W. (1990) The influence of German economics on the works of Menger and Marshall [Caldwell, Bruce J. ed. (1990), pp. 31 - 69]
- Tomo, Shigeki (1994) *Eugen von Böhm-Bawerk - Ein großer österreichischer Nationalökonom zwischen Theorie und Praxis* - Metropolis Verlag
- Tomo, Shigeki (2003) 1922: A Watershed year for Mises and Hayek, Working Papers of Mises Institute. (<http://www.mises.org/journals/scholar/tomo.pdf>)
- Tomo, Shigeki lec. (2005) 6/ Menger's *Grundsätze* as a realist work: The command concept, presented at the 2005 ESHET Annual Conference
- Tomo, Shigeki (2005) Menger and Böhm-Bawerk: A Reconsideration on the Austrian "goods" conceptions, presented at the 75th annual meeting of Southern Economic Association.
- Weiss, Franz Xavier ed. (1924) *Gesammelte Schriften von Eugen von Böhm-Bawerk* Hölder-Pichler-Tempsky A. G., Wien

- Wiseman, Jack ed. (1983) *Beyond positive economics. For Section F (Economics) of the British Association for the Advancement of Science*, Macmillan, London and Basingstoke.
- Wieser, Friedrich Freiherr von (1884) *Über den Ursprung und die Hauptgesetze des wirtschaftlichen Werthes*, Alfred Hölder k. k. Universitäts-Buchhändler, Wien
- Yagi, Kiichiro (1993) Carl Menger's *Grundsätze in Making*, *History of Political Economy*, vol. 25, pp. 697 - 72
- 塘 茂樹 (1997) 「メンガーとオーストリア学派」 [田中 敏弘 編 (1997) 『経済学史』 八千代出版, pp. 225 - 241
- 塘 茂樹 (2002) 「シュパンの普遍主義の成立とオーストリア学派への影響」 [伊藤 幹雄・大平 哲 編 (2002) 『マクロ経済学の方法・理論と実証・政策』 御茶の水書房, pp. 47 - 67]
- 林 治一 (1966) 『オ - ストリア学派研究序説』 有斐閣
- 安井 琢磨・八木 紀一郎 訳 (1999) 『国民経済学原理』 日本経済評論社
- 八木 紀一郎 (1988) 『オーストリア経済思想史研究 - 中欧帝国と経済学者 -』 名古屋大学出版会
- 八木 紀一郎・中村 友太郎・中島 芳郎 訳 (1982) 『一般理論経済学 遺稿による「経済学原理」第二版』 2 vols. みすず書房
- 八木 紀一郎 (1999) 「解題」 (安井 琢磨・八木 紀一郎 訳 (1999) pp. 253 - 267)
- 八木 紀一郎 (2004) 『ウィーンの経済思想』 ミネルヴァ書房



# Menger's *Grundsätze*

— A proposal for its systematic understanding —

Shigeki TOMO

## Abstract

This paper aims at presenting a systematic understanding of Carl Menger's *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre* by illuminating the central role played by the concept of command (“*Verfügung*”) not only in many fundamental concepts (goods, economic goods, value, marginal principle, capital, interest, and commodity etc.), but also in the connection between methodological-individualist (the first 5 chapters) and spontaneous-order parts (the last 3 chapters) of *Grundsätze*. From the new point of view with the command concept, partly based on several results from some studies in the formative period of *Grundsätze*, the author reviews many interpretations by the Mengerian scholars including Mises, Hayek, Kirzner and Streissler etc. Since the command relation between an economizing individual and things is an objective moment, the result of this paper will question the orthodox interpretation of Carl Menger as one of main representatives who introduce subjectivism into economics.

**Keywords :** Carl Menger, the command relation, subjectivism, methodological individualism, the spontaneous order